

『失われた時を求めて』にみる『イーリアス』の俤

生 田 康 夫

はじめに——即席の記憶

『失われた時を求めて』の読者の大きな楽しみのひとつは読みながら自らの記憶が呼び覚まされていくことにある。あの大冊の随所で「ああ、この情景はいつか出会ったことがある」とか「うん、この感覚はどこかで味わったことがある」といった風に。

呼び覚まされ甦るのは読者自身の直接体験の記憶であることが多いのだが必ずしもそればかりではない。過去の芸術作品の記憶、即ち読者が過去の芸術作品に接した際の印象の記憶という場合もある。

本稿では想起されるのが『イーリアス』である場合を、それ

も『イーリアス』への言及が明示されていない箇所を取り上げてみたい。おそらくブルースト自身はそれらの段を書く時『イーリアス』を念頭に置いていなかったであろうと思われる箇所である。

ブルーストはラスキン著『アミアンの聖書』翻訳出版にあたり「はしがき」でこう書いている。

我々は（ある芸術家の）様々な作品の比較対照を通して共通の特徴を引き出すのだが、その共通の特徴の集合こそがその芸術家の精神的相貌を形作るものだ。（……）『アミアンの聖書』が様々な類似により、それが遠く離れたものであれ、ラスキンの他の著作の記憶を呼び起こす度に脚注を

付し、私の心に甦った一節をその中に翻訳することによって(……)私は読者にラスキンにおいて不変で根源的であるものを認め得る位置に立つてもらえるように努めた。そのようにラスキンの他の著作の思い出を配置することによっていわば即席の記憶を提供するよう試みたのだ、それが一種の共鳴箱となり『アミアンの聖書』の言葉が親密な木霊を生ぜしめてより豊かな響きを起こすようにと。(*)

ブルーストのこの一文に則して言えば本稿が目指すのは、「アミアンの聖書」を『失われた時を求めて』に「ラスキンの他の著作」を『イーリアス』に置き換えてみることに、そして『失われた時を求めて』が『イーリアス』の記憶を呼び起こすときブルーストの章句につづけてホメーロスの対応する章句を配置することで即席の記憶を提供し、「ラスキンにおいて不変で根源的であるもの」のかわりに「ヨーロッパ文学の伝統において不変で根源的であるもの」をたずねようとするにある。

ブルーストとホメーロス

A. 直接の言及

『失われた時を求めて』において『イーリアス』が言及され

ることなしに想起される箇所をみていく前に、ブルーストにとってホメーロスそして特に『イーリアス』がどのような存在であったかを明示の言及をもとに一瞥しておこう。

ある書簡の中でブルーストは『イーリアス』について「この古く驚くべき書物(ce vieux livre prodigieux)」(*)と呼んでいる。また同じ書簡で、『イーリアス』は一人の実在したホメーロスの作品であるとの見解に同調している。

『読書について』(初出はラスキン著『胡麻と百合』訳書序文)において、少年時代の読書を回想しつつ、こよなく愛した章句としてゴーチエによる次の一節を上げている。「笑いは本来残酷なものではない。それは人間と動物を区別するものであり、ギリシア詩人ホメーロスの『オデュッセイア』に明白に見られるごとく、永遠に続く閑暇においてオリュンポスのに哄笑する不死にして至福の神々の特性なのだ」(*)

『失われた時を求めて』でもいくつかの言及があるが数は多くない。例えば、「私たちはホメーロスが英雄たちに与えた形容詞のような響きの良い組み合わせの呼び名の銘酒を飲んだ」(*)。この枕詞的形容詞については、小説の登場人物プロックに誇張した形で真似させている。しかしそれは気取り屋プロックの銜学趣味を強調するものとなっている。そして、「我々はホメーロスの英雄の中で我々が抱くのとほぼ同じ感情に出会って驚くのだ」(*)との言及もある。

『失われた時を求めて』には『イーリアス』からの直接の引

用はない。ただトロイア戦争の原因となったヘレネーの美しさへの言及として、トロイアの長老が洩らす「我々の苦しみは彼女のまなざしの一つにも価せず」*_六の一節が引用される。ただしこれは『イーリアス』原文からではなくそれを踏まえたロサンサールの詩篇からの引用である。

このようにブルーストが『イーリアス』の古典としての価値を高く評価していたことは間違いないのだが、『イーリアス』との親密さ度合いという点では表に現れた限り強いとは言えないようだ。ブルーストの古典との関係がもっとも深いのはなんといっても『聖書』、そして『千夜一夜物語』であり、次いでラシースだろう。

B・相違

ブルーストとホメーロスの間のこの距離、それも当然である。ブルーストとホメーロス、『失われた時を求めて』と『イーリアス』では気質、世界が大きく異なる。対蹠的といってもいいかもしれない。ここでは相違が顕著な三つの側面をみておこう。

a. フローラとファウナ

『失われた時を求めて』の作者はまぎれもなくフローラの作家である。この小説に登場する花は、サンザシ、キンポウゲ、グラジオラス、睡蓮、菊、薔薇、アイリス、水仙、マロニエ、

カトレア、リラ、堇……と尽きることがない。それらの精細な描写を、多くの草花に詳しくない読者は途方にくれて読み飛ばしたくなるところ、鮮やかな比喩に出会う期待で辛うじて読み進める。そしてたいていの場合、苦勞の末期待はかなえられることとなる。

これに対して『イーリアス』の作者はファウナの詩人だ。馬はもちろんだが、獅子、猪、牛、羊、驢馬、犬、鹿、ジャッカル、蛇、鷲……とこれまた枚挙に暇がない。そしてそれらの描写いづれもが生彩を放っている。

ブルーストに動物、ホメーロスに植物が全くないわけではないが圧倒的に少ない。方や花を女性に、女性を花に喩え、例えば散歩の途次抱きしめたいと夢想した農家の娘について「私にとってこの娘はそれ自身が他の植物より背丈が高いだけの地方特有の植物だった」*_七という作家、方や詩篇の劈頭で「怒りを歌え」*_八と植物にはなく動物の本性の極とも言うべき感情を主題として提示している詩人、ここには両者の基本的な気質の相違がうかがえる。

b. 静止と運動

『失われた時を求めて』の話者は立ち止まる人である。印象深い情景を前に立ち止まる（あるいは立ち止まろうとする）場面が何度となく出てくる。立ち止まり、観察し、想起し、内省する。そして表現を探し求めているのだらう。典型的なのはコン

ブレーの教会の懐かしい姿の思い出について記した次の場面だ。

そして今日でも地方都市であるいはパリのよく知らない界限で私を「しかるべき道に戻して」くれた通行人が、遠くの目印として行くべき道の一隅で聖職者の帽子の先端を持ち上げているような病院の鐘楼や修道院の鐘塔を示してくれるとき、私の記憶がそこに僅かなりとも消えてしまった懐かしい姿との類似をほんやりと見出すことができるなら、私がまだうろろしていないかと振り返った相手は、こちらの姿を見てびつくりするかもしれない。というのも私はやりかけの散歩も必要な用事もすっかり忘れて、その鐘塔の前に幾時間でもじっと佇み（……）その時（……）自分のたどるべき道を求め、とある街角を曲がっているさなかなのだ、心の中の街角を。（*九）

一方『イーリアス』はスピードと運動感覚、身体感覚に溢れている。全編そうなのだが、例えば次の一節。これは勇猛のアキレウスがあまりに大勢のトロイア兵を殺戮しその死骸で河を一杯にしたので、河の神が怒りアキレウスに襲い掛かる場面だ。

アキレウスは恐れて渦から跳び出て野原を素早く駆って行くこうとはやった。だが大いなる神は一向やめず黒い波を上げて襲い掛かった、神の如きアキレウスを抑えトロイア方

の災いを防ごうと。だがアキレウスは跳びのいて投槍の飛ぶ距離を駆け去った、狩する鳥、翼持つ類のうちで最速最強の黒鷲の勢いさながらに。胸の上では青銅が凄まじく響きわたる。河をよけて逃れようとするが、後ろから河は轟然と追いかけてくる。あたかも掘割作りが水影暗い泉から植木や苑生の中を水の流れを導いてくるときさながら。鍬を手に掘割から水仕切りを取り去れば、流れ出る水の勢いに小石はひとつも残らず転がり、水は速やかに下って坂では音を立てて落ち、水の導き手をさえ追い越すのだ。（*十）

『失われた時を求めて』において例えば話者が走ったのはたしか一箇所だけ、ヴェネチアから汽車で先に出発せんとした母親にぎりぎりまで追いつくあの場面だけではなかったか。その「全速力で走った（*Je pris mes jambes à mon cou* 脚を首にくっ付けた）」（*十二）の表現は『失われた時を求めて』では異質で（『イーリアス』にこそ相応しい）、それだけに小説の中でこのあたりは異様さただよう場面となっている。

c. 恋愛への見方

『失われた時を求めて』が恋愛の種々相と恋愛に纏わる心の變を病理学的に、いやそれ以上の精妙さを以って徹底的に描いた作品であることは多言を要しない。

一方『イーリアス』はどうか。戦記ではありながら愛の営み

の場面、美への賛歌もある。ゼウスとヘーレー、パリスとヘレネーが臥所を共にする場面、アプロディーテーやヘーレーやヘレネーの美しさの描写、いずれも優美を極めている。それにそもそもトロイア戦争は女神間の美を競う争いとそれに伴う略奪婚に起因したものだ。ただその描き方は『イーリアス』では常にクッキリとした輪郭をもっている。心の襞に分け入るブルーストとは対蹠的なギリシア彫刻的明晰さだ。

また『イーリアス』の詩人は恋愛の価値を相対的に見ていたようだ。パリスは色男だがダメ王子的側面がある、美の女神アプロディーテーも色事にしか能がなく人間にさえ罵倒されることがある、という風に戯画化されているのだ。

先に引いた美の賛歌「我々の苦しみは彼女のまなざしの一つにも価せず」について、『イーリアス』と『失われた時を求めて』とそれぞれにおける位置づけを比較してみると面白い。『イーリアス』ではこの章句の該当箇所に続いて、「しかしながらそうではあるけれども船に乗って帰るがよい、彼女がここに残って後々我々と子孫とに禍いとならぬように」(※12)と美の価値を認めつつそれを相対化した賢者の判断が示されている。一方、『失われた時を求めて』の方を見ると、ここでも単純に美を称えるために引用したのではないが、またそれを相対化しているのでもない。話者が熱を上げているアルベルチヌの写真を見たサン・ルーが先の章句とは正反対の感想を抱いたという、ブルースト得意の恋愛の虚妄を言うための道具立てである。

このようにブルーストとホメーロスの間には距離があり相違が目立つ。にもかかわらず『失われた時を求めて』に『イーリアス』の倂を認めることができるならば、それは二十世紀作家ブルーストが無意識下で呼び起こした最古の詩篇の倂であることに加え、これだけ対蹠的とも言える両者間に響きあうものだけに、ヨーロッパ文学の伝統の特徴、それも深層に脈打つ特徴を表しているのだろう。

いくつかの倂

A. 技能——台所のフランソワーズと仕事場のヘーバリストス

まず、『失われた時を求めて』の話者が家政婦フランソワーズの台所での働きぶりを見る場面である。

私が献立を聞きに降りていく時間には夕食の支度はもう始まっており、フランソワーズは、お伽の国で大男が料理人として雇われるように彼女の助手になった自然の力に命令しながら、石炭を細かくしたり、ジャガイモを湯気でふかしたり、また頃合の火で料理の傑作を作ったりしているのだった。それらの料理は、陶工の作るいろいろな器、すなわち大きな桶や鍋、大鍋、魚鍋をはじめいろいろな大きさ

のシチュウ鍋のコレクションを経てジビエのテリース用の壺やお菓子の型、さらにクリームを入れる小さな壺などの器で下ごしらえされたものであった。(※十三)

一方『イーリアス』において女神テティスが鍛冶の神ヘーパイストスを訪問する場面。

白銀の足のテティスはヘーパイストスの館に着いた。朽ちることない、星をちりばめた青銅造り、神々の住いの中でも一際目立つ館で、脚曲がりの神自らが造ったもの。見れば、神は汗まみれで体を捻じりながら轡にかかつて立ち働いているところだった。(……テティスはヘーパイストスに武具作製方を頼む。テティスは恩義のあるヘーパイストスは二つ返事で請合う……)テティスをそこに残して轡のところにいき、それらを火に向けて仕事に取り掛かれと命ずると、全部で二十ある轡がいつせいに埧塙に風を吹き込みはじめ、いろんな種類の程よい息を送り出して、ある時は立ち働いているヘーパイストスの傍らにあるかと思うと、時にはまた神様のお望みどおりに仕事がなされるようにした。(※十四)

フランソワーズの料理の腕は傑出しており、『失われた時を求めて』において彼女は技能の化身だ。ギリシア神話のヘーパ

イストスは火の神であり鍛冶の技に長けた技能の神だ。両者共に火を扱うことで技能を発揮している。

また、ヘーパイストスが『イーリアス』においてその道化的言動を笑われながら技と力で重要な活躍をしているように、フランソワーズは小説において無教養ゆえに話者に時には馬鹿にされながらも中世以来のフランス農民の心性を代表し、その心性を話者の眼の背後にある(内側にあるというべきか)来るべき作家の眼は実は深い興味と敬意を持って観察している。

こうして、台所のフランソワーズの立ち居振舞いは遠くヘーパイストスの像を浮かび上がらせるのである。

B. 時刻——病む旅人の真夜中と樵人の昼時分

『失われた時を求めて』の冒頭近く、夢から覚めた話者が時刻を確かめる場面。

時計を見るためにマッチをするのであった。やがて夜中の十二時だ。それは、病人がどうしても必要があつて旅行に出かけ見知らぬホテルに泊まることになり、発作を起こして目がさめたときにドアの下から差し込む一条の朝の光を見つけて喜ぶ瞬間である。助かった、もう朝だ！じきに従業員が起きてくる、ベルも押せるし助けにも来てくれる。楽になれるという希望が苦しみに耐える勇気を病人に与え

てくれる。ちようどそのとき、彼は足音を聞いたような気がする。足音は近づき、そして遠ざかる。ドアの下からもれていた朝の光は消えてしまった。十二時だ。いまガスを消したところだったのだ。最後の従業員も行ってしまい、こうして一晩中薬もなしに苦しみつづけなければならぬのだ。(※十五)

一方『イーリアス』にこういうくだりがある。拮抗していた戦況が傾きかけるときの描写である。

まだ朝方のうち、聖なる日が闇けていく間は、双方からの矢は次々と当たり戦士たちは倒れていった。だが丁度樵人が山間で昼飯をしたためる時分、大木を切りつづけて両手はくたびれ厭気が彼の心に到りそして楽しい食事の欲が心を掴む、そういう時分にダナオイ勢は戦列中お互い励ましあって自分たちの武勇によって敵の陣を破った。(※十六)

小説や叙事詩の筋の中に出てきたある時刻について、その本筋と全く関係のない事象を持ち出してきて「それはまさにこういう時刻だ」という。これは一種の比喩であるがそれ以上に時刻の本意の定義である。もとより人によりその定義は千差万別だろうが、その定義が真実をついている場合には共感を誘う。ブルーストの真夜中においては生死の不安と幾分かの滑稽味、

ホメーロスの昼時分にあつては戦闘場面のさなかでの平和な生業の一点描、いずれも思わず膝を打つような定義だ。それぞれの季節に本意があるように時刻にも固有の本意があるのだろう。

C. 溜められた力——独楽と馬

『失われた時を求めて』で、とある秋の日、話者が読書後散歩に出かける場面。

午前中ずっと部屋で本を読んで疲れると、私はチェックのマントを肩にして外へ出る。長い間じつと同じ姿勢でいなければならなかった身体はその場で蓄積された活力とスピードで装填され、次には手から放たれた独楽のように四方八方にそれを燃焼させる必要があつた。家々の壁(……)藪の茂み、そういったものがごとく私の傘や杖に叩かれ、私の喜びの叫びを浴びせられるのだった。(※十七)

『イーリアス』でパリスが戦闘に赴く場面。

パリスもぐずぐずはしていないで(……)速い足を頼みにして町を抜けていった。あたかも既の駿馬が飼葉に食い飽きてから、繋がれている紐を振り切つて平原の上を蹄を鳴らしつつ駆けつけていくように、流れも美しい川でいつも水

浴びし馴れているので(……)そのようにプリアモスの子
パリスはベルガモスの頂きから鎧を太陽の如く輝かせて駆
けていった。(※十八)

この力がどうして溜められたか、どう放たれたか、両者の場
合を見てみよう。

上の『失われた時を求めて』の引用では読書によって溜めら
れ、道端のものを叩くことで放たれている。実は小説ではその
少し先で重要なことが語られる。「私は、水の上にも壁面にも
ほのかな微笑が浮かびそれが空の微笑に込んでいるのを見てい
ても立ってもしられず、たたんだ傘を振り回しながら大声で叫
んだ、『畜生、畜生、畜生、畜生！』だが同時に私は自分の務
めがこの不透明な語に満足するのではなく、私のおぼえた歓喜
をはつきり見定めることなのであった」(※十九)

これは話者の創作に向けた天職の自覚を語る最初のシーンだ。
読書によって蓄積されたエネルギーが創作に結びつく。「美し
い書物は著者にとっては結論(conclusion)であるが読者には促
し(incitation)である」(※二十)という『読書について』の言葉が
想起される。

『イーリアス』のパリスは引用の前、戦闘を抜け出しヘレネー
と臥所を共にしていた。パリスは、自らが原因となった戦争を
自分とメネラーオスとの一騎打ちで決着させるとの両軍合意が
なされ二人の戦闘が開始されたにもかかわらず、形勢不利の戦

闘の場を抜け出して、こともあるうに閑事にふけていたわけ
である。ダメ王子たる所以だが、飼業に飽いた馬の如く色の欲
を満たして漸く戦闘意欲が漲ったということか。

このように二つの引用の背景、状況は全く異なるのだが、共
通に「溜められた力」に着目し、共通に比喩をもって表現して
いる。「我々はホメーロスの英雄の中で我々が抱くのとほぼ同
じ感情に出会って驚く」の言葉があったが、我々はホメーロス
の中でブルーストと同じ詩心、同様の表現に出会って驚くのだ。

D・洗濯場——バルベック旅行とヘクトール追走

『失われた時を求めて』で話者がバルベック行き列車から見
た車窓の風景。

線路の方向が変わったので汽車は曲がり、朝の光景は窓枠
の中でとある夜の村に取って代わられた、その家々の屋根
は月光に青く映え、洗濯場は夜の乳白色の真珠の帳に覆わ
れ、空にはまだびっしりと星がちりばめられているのだっ
た。(※二十一)

『イーリアス』でアキレウスがヘクトールを追走している最
中のトロイアの野の風景。

二人はこうして物見の傍や風に揺れる無花果の樹の傍を過ぎ、城壁の下をずっと車道に沿い馳せ、流れ清い二つの泉に來た(……)一つは温かい湯になって流れその周りには燃える火からのように湯気が上がっており、もう一つは夏の間も冷たい霰か雪かそれとも水が凍った氷のような涼しい水を吐き出している。この泉の傍に立派な石造りの洗濯場があり、その上でまだ平和だった頃にはトロイアの妻や美しい娘らがつややかな衣を洗ったものだった、まだアカイアの子等が来る前は。(※二十二)

共同洗濯場。ここには二千数百年の時の懸隔はない。作家と詩人が共通に疾走するものから同じものを見ている。共同洗濯場にはおそらく人類数千年の歴史があるのだろう。そこには、水があり石があり土地がある、生活があり平和があり女性的なるものがある、そして今は不在の談笑も歌声も。『失われた時を求めて』の話者は、この懐かしい情景が予兆であったかのように、次の停車場で見かけた土地の精ともいふべき牛乳売りの女に強く惹かれることとなる。一方『イーリアス』の共同洗濯場は、これもやはり数千年を超えて繰り返されてやむことのない戦いとの痛切な対比をなしている。

E. 神格——シャルリュスの内面とトロイアの戦場

『失われた時を求めて』にはこのような描写がある。嫉妬に駆られたシャルリュスの内面風景だ。

恋愛はこうして文字通り思考の地質学的隆起を引き起こすのだ。シャルリュス氏の思考は数日前までは平野に似てきわめて平坦に続くので、見渡す限り大地の表面から顔を出している観念はひとつとして認められようもなかったのだが、そこに突然岩のように固いくつもの山の塊が立ち上がり、しかもそれは彫刻家の誰かが大理石を運び出すかわりにその場に刻んだかのように彫りこまれ、雲を突くばかりに巨大な「憤怒」「嫉妬」「好奇」「羨望」「憎悪」「苦惱」「傲慢」「恐怖」「愛情」が群れを成して身をよじるのだった。(※二十三)

『イーリアス』で神々が両軍に戦闘開始をけしかける場面はこうだ。

一方をアーレスが駆り立てると他方を燦めく眼のアテーネーが駆り立てた。また「恐怖」と「潰走」と、そして戦士らの殺し手アーレスの侍女にして絶えず勢い立つ「争い」とが(駆り立てた)。この女神「争い」は始めはあるかな

きかに頭をもたげるほどだが、そのうち虚空に頭を衝き立てつつ地上を歩む。その女神がこの時も彼らの真つ只中に惨憺たる争いを投げ込んだのだ、軍勢の中を行き戦士らの呻吟を増しながら。(＊二十四)

シャルリュスは言動において、傲岸不遜、異様な倒錯者振りを發揮するかと思えば時に鋭い審美眼を示し、『失われた時を求めて』の百人を超える登場人物のなかでもその存在感は他を圧しているのだが、この内面風景もそれを裏打ちするようだ。さまざまな情念が強度のあまりそれぞれほとんど神威を帯び神格を有するまでに至っている。

『イーリアス』の「恐怖」と「潰走」と「争い」はそのまま神とされている。「争い」の「始めはあるかなきかに頭をもたげるほどだが、そのうち虚空に頭を衝き立てつつ地上を歩む」は万古不易の「争い」の有り様を活写している。『イーリアス』には同様に「祈願」と「迷妄」についてイメーヂ鮮やかなこういう詩行もある。「祈願」達は大いなるゼウスの娘でありながら跛で跛だらけで目は藪睨み、「迷妄」のあとに懸命についていく。「迷妄」は丈夫で足達者で「祈願」達をずっと引き離して走り先回りし、大地のいたるところで人間どもを痛めつける、それをかの女神「祈願」達はあとから癒すのだ。(＊二十五)

人間の行動や情念のもっとも激しくもっとも切実なものが神話の源泉となる。ブルーストのペンによる巨人シャルリュスの

造型にはこの古代ギリシアの神話的世界が甦っているようだ。

F. 母親——話者の母とアキレウスの母

『失われた時を求めて』の話者と『イーリアス』のアキレウスは全く似ていない。方や繊細な感受性に富みそれだけに神経過敏でもある話者、方やアカイア勢随一の勇猛を誇り直情径行的なアキレウス、対蹠の極とも言うべきだ。ただ母親との関係は驚くほど近いものがある。

『失われた時を求めて』で話者が母親におやすみの抱擁を求める場面。

ママンの蠟燭の光が階段のほうに見える。それからママン自身が見えた。私は飛び出した。はじめママンは何事が起こったのかわからずに驚いて私を見つめた。(……) 私は母にこう繰り返すのだった、「おやすみを言いにくくて」。(……) 私の鳴咽はかきたてられた。そしてその時私は、それまで決して私の感傷に引きずられることのなかったママンに私の涙が伝染し、涙をしきりにこらえようとしているのがわかった。ママンは私に気づかれたことを感じとって笑いながら言った。「まあまあこの可愛いおいたさんたら、もうちょっとで母さんまでお前と同じおばかさんにされてしまいそうね」。(＊二十六)

一方『イーリアス』でアキレウスが母テティスに助力を懇願する場面。

アキレウスは涙にくれてすぐ仲間から遠く離れて、灰色の海の渚に坐り葡萄酒色の海を眺めた。そして愛する母に両手を差し伸べてしきりに祈った。「(……) 広く統治するアガメムノーンが私を侮辱したのです、私の褒美を自ら奪い取って」。涙を流しながらこう言った。この言葉を海の深みで父なる老神の傍に坐っていた母が聞き給うた。そして灰色の海から霧のようにすばやく浮かび上がって来て涙にくれている彼の前に座り手で撫でさすり(……) 涙をさめざめと流しながらその彼に応えて言う、「何とかわいそくな私の子よ、一体どうして私はお前を悲しい運命に生んで育てたのか。お前は船の傍らで涙も苦しみもなく坐っているべきものを」(*二十七)

こうして並べてみるとアキレウスの場合の方が異様に見える。あれだけの猛者が涙を流して母親に哀願し、撫でさすってもらうのだから。アキレウスがまるで小説の過敏な幼児になったかのようだ。それだけにここには共通に母と息子の関係のひとつの原型がある。悲しむ息子、母親への訴え、そして母親の悲しみ上の引用はいずれも物語のはじめ近くに見られるのだが、このあとの両物語の展開においても母親は目立たぬながら大きな役

割を果たしている。それは母親の期待であり、その期待への裏切りである。

話者の母親は息子の健康、生活の安定を望み、アキレウスの母親は息子に「涙も苦しみなく」いることを望む。しかしその期待はいずれも裏切られる。話者は喘息もちで、定職はなく、文学に打ちこむものの成功はおぼつかない。アキレウスの方もアガメムノーンの侮辱への怒りは続き、腹心の部下にして刎頭の友バトロクロスを失って悲嘆にくれる。母親の悲しみはやむことがない。

しかしまた、現世の母親の期待を裏切り続ける中で何が進行していたか。話者は「死んだ後虫に喰われる身体にとっては何かかわりもない嘆賞を引き起こすであろう一枚の絵を何度も書き直す」(*二十八) ようにして作品創造を準備していたのだった。そこには、身を削る怒りと悲嘆の深さ、そして共有する苦しみ故に持ちえた老王プリアモスとの共感の深さによって後世の嘆賞を呼ぶであろう不滅のアキレウス像と重なるものがある。

G. 文体のリズム

『失われた時を求めて』の文体には独特のリズムがある。そして概してそれは『イーリアス』の語り口とは大いに異なる。前者は重層的で委曲を尽くす文体、後者は簡潔明瞭でスピードに富んだ文体、ということでも両極端ともいえそうだ。だがブルー

スト特有の文体と思えるものを『イーリアス』の語り口の中に発見することもある。

ブルースト特有の文体のひとつに、形容詞句や副詞句そして複文を迷路のように連ね徐々に密度と緊張を高めていき、最後は画龍点睛の一句を配して鮮やかに締めくくる文体がある。これはブルーストの独擅場といった趣があり、『失われた時を求めて』にはこの種の章句が犇めき合っている。次の一節はその文体でありながら最も簡明な例だ。

何かが当たったように窓ガラスに小さな音がひとつ、続いて上の階の窓から砂粒のようにいっぱい軽やかに落ちてきたものがあり、次いでその落下は広がり、規則的になり、ひとつのリズムを帯び、流れになり、響きを発し、音楽を奏で、無数に、あたり一帯を覆った。雨だ。（*二十九）

もうひとつ例を挙げよう。『失われた時を求めて』のヴェネチアの章には次のような一節がある。

ある人と一緒に美しいものを見る楽しみではないにしても少なくともかつてそれと一緒に見たという楽しみが存在することは確実に思われる。（……）それに無関心でありえないときが今やってきたのだ、その洗礼堂とモザイクを思い浮かべるとひんやりとした薄明かりの中、私の傍らに、

ヴェネチアにあるカルパッチオの描いた『聖女ウルスラ伝』の中の年とつた婦人のように恭しくも情熱的な心を込めて喪服に身をくるんだひとりの婦人がいたことを、頬を赤くし、悲しげな目つきで、黒いヴェールを垂らして、柔らかな光に照らされたサン＝マルコ寺院から何物も外へ連れ出すことはできそうにないその婦人、まるでモザイクのようにそこに彼女用の不動の席が確保されている以上いまでもサン＝マルコ寺院に行きさえすれば必ず再会できるだろうその婦人、その婦人こそ私の母であることを。（*三十）

一方『イーリアス』において、葬送の馬車競技で先頭を切る騎手を武將イードメネウスが遠望する場面。

おお親しいアルゴス勢の指導者であり支配者である方々、私一人にだけ見えるのだろうか、また御身たちにもか。どうやら別な馬が先頭にいるように私には思える。そして別の騎手が見える。するとさっきの先に出ていた馬は野面であたはつたらしい。（……）あるいは廻りこむ折やり損なつたのか、そこで騎手は放り出され車も壊れ馬は猛り狂って道から逸れて行ったのか。だが、御身たちも立ち上がって見てくれ、どうも私には十分見分けが付け難いぞ。私にはどうもあの男のように思える。アイトーロス出の、アルゴス人を率いる大将、馬を馴らすテューデウスの子、剛勇の

ディオメーデースだと。(※三十一)

『イーリアス』には珍しい語り口だが、ブルーストの文体のリズムを髣髴とさせる。この場合、時系列は逆転するが『イーリアス』における『失われた時を求めて』の『佛』というべきかも知れない。

あらためて『イーリアス』の一節を見ると、それがこの文体の素朴で力強い原初の姿を示していることに気付く。生きた現実を前にして目に映ること心に浮かぶことを実況中継しながら忠実に描く。ブルーストはさまざまな印象や心の動きの描写にこの文体を駆使しているのだが、それは、彼自身の言葉に「文体とは潤色ではなく技術の問題でもない」(※三十二)とあるとおりホメーロスが(イードメネウスの口を借りて)先頭を切る騎手のありさまを描いたように、印象や心の動きの現実を忠実に描くことに徹した必然の結果なのである。

むすび ― おのずから成る記憶

以上、『失われた時を求めて』に『イーリアス』の佛がうかがえる箇所をいくつか挙げてみた。それらはいずれも、ホメーロス以来ヨーロッパ文学の深層に脈打っていた特徴が二十世紀の相のもと、ブルースト的世界の生地には織り込まれた形で顕わ

れたものだ。あるいはその佛は仄かなものであるかもしれない。しかしそれもヨーロッパ文学の伝統固有の一つの口調、一つの仕草であるに違いない、ちやうど電話応答の口調が父親そっくりだったり、春日傘をたたむ仕草が母親譲りだったりするように。

ところで、ブルーストは本稿「はじめに」で引用した一文に続けてこういつている。

しかしそれらの(即席の記憶が生ぜしめる)木霊が『アミアンの聖書』の言葉に呼応することはおそらくないだろう、普段は視線から隠されており私たちの生そのものが様々な距離の違いを日々測っている遠いまた近い地平線からおのずから成った記憶の中でと同じようには。それらの木霊は、類似に引き寄せられて現に目の前にある言葉にたどり着くのに私たちの生の広がりにも他ならぬそして記憶の詩情のすべてに他ならぬ中間に置かれて快く抵抗する大気を潜り抜ける必要がないのだろう。(※三十三)

一読したのではとても理解できない難しい文章だ。ここには二重の難しさがある。一つにはブルースト独特のイメージのあまりにブルースト的な表現だからで、もう一つはブルースト自ら訳書でやらんとしていることすなわち即席の記憶を提供する

ことの限界を指摘するような考えを表明しているからだ。

一つ目の難しさについては『失われた時を求めて』に親しんだ読者なら二三度読み返すことで克服可能だろう。すなわちブルーストが訳注の中で提供しようとするいささか人為的な「即席の記憶」と「おのずから成った記憶」とを対比し、前者は後者のように生の広がりや詩情の中を通ることがなく後者ほどに呼応して響き合うことはないというのだ。

二つ目の難しさはどう理解すべきか。自分が出版しようとしている訳書についてその意義を減殺しかねないことを敢えてその「はしがき」で記しているとは。思うに、ブルーストのラスキン関係著作においては、ラスキンの使徒ブルーストは時折来るべき作家ブルーストにとって代わられるのであり、この部分はまさに来るべき作家がラスキン翻訳はしがきの範疇を逸脱して自らが抱きつつあった主題の予感を語り（というのも「即席の記憶」と「意志的記憶」の間、そして「おのずから成る記憶」と「無意志的記憶」の間にはあと一歩の距離しかないのだから）、それによって知らず知らず自らによって書かるべき書『失われた時を求めて』を予告したものなのであろう。

さて、引用文の解釈について寄り道をしたが最後に本題に戻ろう。『失われた時を求めて』における『イーリアス』の俳は丁寧に見ていけばまだ他にいくつもあるだろうが、それをたずねる試みについても「即席の記憶」の提供はここまでにして、

気の赴くままになされる読書の中で「おのずから成る記憶」にゆだねることとしよう。そしてそこで響き合うものに耳をすますこととしよう。

【註】

- (*)一 『アミアンの聖書』メルキュールドフランス版9／10頁
- (*)二 ノードリンガー宛1905年7月または8月付書簡
- (*)三 『胡麻と百合』メルキュールドフランス版30／31頁
- (*)四 『失われた時を求めて』ブレイヤード四冊本新版（以下同）第2冊533頁
- (*)五 『失われた時を求めて』第2冊710頁
- (*)六 『失われた時を求めて』第4冊22頁
- (*)七 『失われた時を求めて』第1冊155頁
- (*)八 『イーリアス』第1歌1行
- (*)九 『失われた時を求めて』第1冊66頁
- (*)十 『イーリアス』第21歌246／262行
- (*)十一 『失われた時を求めて』第4冊234頁
- (*)十二 『イーリアス』第3歌159／160行
- (*)十三 『失われた時を求めて』第1冊119頁
- (*)十四 『イーリアス』第18歌369／473行
- (*)十五 『失われた時を求めて』第1冊4頁
- (*)十六 『イーリアス』第11歌84／91行

- (*十七) 『失われた時を求めて』 第1冊 152～153頁
- (*十八) 『イーリアス』 第6歌 503～513行
- (*十九) 『失われた時を求めて』 第1冊 153頁
- (*二十) 『胡麻と百合』 メルキュールドフランス版 32頁
- (*二十一) 『失われた時を求めて』 第2冊 15～16頁
- (*二十二) 『イーリアス』 第22歌 145～156行
- (*二十三) 『失われた時を求めて』 第3冊 464、465頁
- (*二十四) 『イーリアス』 第4歌 439～445行
- (*二十五) 『イーリアス』 第9歌 502～507行
- (*二十六) 『失われた時を求めて』 第1冊 35、38頁
- (*二十七) 『イーリアス』 第1歌 348～361行、413～416行
- (*二十八) 『失われた時を求めて』 第3冊 693頁
- (*二十九) 『失われた時を求めて』 第1冊 100頁
- (*三十) 『失われた時を求めて』 第4冊 225頁

- (*三十二) 『イーリアス』 第23歌 457～472行
- (*三十三) ル・タン紙 1913年11月13日付インタビュー
「プルーストによる『スワン』解説」
『アミアンの聖書』メルキュールドフランス版 10頁

引用文の翻訳については下記諸家の訳を参考にさせていただきながら拙訳した。

- 『イーリアス』 平凡社版 呉茂一訳
- 明治学院大学言語文化研究所版 ホメーロス輪讀會訳
- 『榎植』所載 満田郁夫訳
- 『失われた時を求めて』 集英社版 鈴木道彦訳
- 『アミアンの聖書』 はしがき 筑摩書房版 岩崎力訳
- 『読書について』 (『胡麻と百合』序文) 筑摩書房版 吉田城訳

「ホメーロス輪読会」の感想

生田康夫

次頁の記事「受け継ぐ西協の学統」が掲載されたのが一九八三年、そこで誕生を紹介されていた「ホメーロス輪読会」はそれから二十六年間、週一回ペースで開催されてきた。

『イーリアス』の舞台は包囲十年目を迎えたトロイアの戦場だった。それまでに閲した戦いの期間を詩篇は「大いなるゼウスの統べる実に九年という歳月が過ぎ去り、船木は朽ち果て結網もすっかり緩んだ」(第二歌一三四―一三五行)と歌う。『オデュッセイア』の主人公の故郷帰還は二十年目であり、遠征出發時幼かった息子テレマコスは成人している。二十六年はそれ以上だ。当然輪読会参加メンバーは大分入れ替わっているが松明は受け継がれ、先日第七百回目を迎えた。これは驚くべきことではないだろうか。

輪読会七百回の歩みについては、筆者は会に近年加わった者

であり、より語り手としてふさわしい方が他におられると思うので、ここでは輪読会について一参加者としての感想を記してみたい。

「ホメーロス輪読会」は『イーリアス』を終え、現在『オデュッセイア』の二十二歌が進行中だ。本誌表紙の背景にあるピエロンの注釈書をテキストに週一回、四十行ほど進む。輪読会のよいところとして、疑問点を質しあえること、感想を交換できることがあるのはもちろんだが、ホメーロスの場合一番の醍醐味は朗読にあるのではないかと思う。

ブルーストは『読書について』において、『ルカ福音書』中の文章を中断するコロンに出会うたびに次に続く唱句を歌い出すために朗読を止めた信者の沈黙が聞こえてきたとして、その沈黙についてこういつている。「その沈黙は一度ならず読んでいる私に薔薇の香りを運んでくれた、その薔薇の香りは(福音書を読む)会合のもたれている天井の高い部屋に開いた窓から微風が広げていたもので、千七百年も前から消え失せることがなかったのだ」(『胡麻と百合』メルキユールドフランス版五十六―五十七頁)

輪読会でも時として同じようなことがある。波のような歩みのような、呼吸のような脈拍のような叙事詩の六脚律のリズムを耳にし口にしてしていると、二千数百年の時を超えてホメーロスその人の朗誦の場に居合わせているような錯覚に陥ることがあるのだ。そんな時、敏感な人であれば白金の言語学研究所の一

室に「葡萄酒色の海」の風のそよぎを感じとるのかもしれない。あたかもブルーストの小説で一片のマドレーヌ菓子の風味が幼年時代の記憶を甦らせるように、句読点やリズムが人類史の記憶をよみがえらせる、これも驚くべきことだ。

ところで、この「驚く」にあたるギリシア語 *deunaiōs* (タウマゾー) についてひよっとして西脇順三郎が漢語との対比で

文化往来

明治学院大学言語文化研究所が、このほど年刊の雑誌「言語文化」を創刊した。一年前に亡くなった英文学者であり詩人であった西脇順三郎の追悼号でもある。歴応義塾を退き明治学院に移った西脇は、この言語文化研究所で国際的にも珍しいギリシア語と漢語の比較研究を膨大な一巻本にまとめあげた。この学統が今回の創刊号に新しい装いでよみがえっている。

今から二十年前、西脇はこの研究所で古代漢語の音体系に疑問を投げかけ「詩経」の購義を始めた。既存の注釈に見られる「無意味な助字」を排し、インド・ヨーロッパ

語系との比較をしながら、漢字の音と義を解明したのだ。語系の異なるとギリシア語と漢語を連結させ、内的相関を試みした大胆な講義だった。「言語文化」には、この講義に参加した学者たちの回想記やエッセーが収録されており、西脇の発想の原点が語

受け継ぐ西脇の学統

られているので、難解な大著「ギリシア語と漢語の比較研究ノート」を解説するヒントが見いだされる。

詩人西脇順三郎の研究は没後一年間の歳月に文芸雑誌や詩誌に出尽くした感があるが、「言語文化」には西脇の同僚や弟子たちが日記や書簡を利用して、詩人の素顔を

描いている。西脇の詩を多彩なものにしていく「ポボーイ」「パバーイ」などが、ギリシア語の感嘆詞から取られた裏話などもある。また西脇は画家としても一家を成していたが、詩と絵画との関連を具体的に書いた話もあり、難解といわれた西脇作品解説の補助線も引かれている。

さらに六世紀ごろから十世紀にかけてのルーン文字の影り込まれた石、木刀、くし入れなどの写真や解説もあり、コンピュータを導入してのギリシア語文献研究のレポートもある。西脇の学統を受け継ぎ、古代ギリシア語でホメーロスを読む会も発足したようだ。一人の学者の成果が新しい形で受容されるところに文化の伝承が根付くのであり、その好例といえよう。

『日本経済新聞』1983年4月27日

何か触れていないかと調べてみると、果たして『ギリシア語・漢語比較研究——材料集1』（明治学院大学言語文化研究所編、三一〇頁）にあった。「讃サン *tan deunaiōs*」としていて、漢語「讃」との間に相関を見出していたようだ。なるほど *deunaiōs* は驚きのなかでも讃嘆を込めた驚きだ。『イーリアス』の最終歌で、ヘクトールの遺体を乞い受けに來たプリアモスとそれを受け入れたアキレウスの間のこんな場面がある。「ダノスの裔プリアモスはアキレウスを *deunaiōs* した、体つきといい様子といい神に見まがうほどであるのを。一方タルダノスの裔プリアモスをアキレウスは *deunaiōs* した、気高い姿を見、言葉聴くにつけ」（第二十四歌六二九～六三二行）

息子を殺されその下手人の下に遺体を乞い受けに來た老王、腹心を失くし老父を故郷に残したまま自らは異国で戦死する運命を知る戦士、その本来仇敵同士の両者が *deunaiōs* し合う。『イーリアス』はまさに驚嘆 (*deunaiōs*) すべき詩篇だ。